
愛闇

満月氷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛闇

【Nコード】

N9751V

【作者名】

満月氷

【あらすじ】

殺し屋のユウくと山に一人で住むカナちゃんは同じ年で幼い頃から相思相愛の仲。ユウくんはカナちゃんにめろめろだし、カナちゃんはカナちゃんですユウくんの正体を知っているどころかお手伝い（つまり人殺しのお手伝い）をしたいと思うほどにまで彼を愛している。仕事（くだいけど殺しのね？）が終わったユウくんは今夜も大好きなカナちゃんに会いに行きます。***シリアスはあっても切なさは全くない、ひたすらお互いを想う二人のお話です***注：リアルな殺しの描写はあまり出ませんが、「殺」の単語が結構出る

ので苦手な方はお気をつけください<基本は一話完結の不定期更新、
時系列もたまにはばらばらになります>

< 恋人同士のお話し > ある日の夜のこと

「ユウくん、今日はなんにんころしたの？」

「うーんとね、ふたりだけだよ」

「すごい！ふたりも！カナもはやくユウくんのおてつだいしたい
」！」

「ちがうでしょ？カナちゃんはお嫁さんになって、ぼくをたすける
んだよ？」

「うん！ユウくんのお嫁さんになっておてつだいする！」

「うん。ならなきゃころしちゃうからね？」

「大好きなユウくんにだったらころされたっていいもん！」

今思えば子供にしてはなんて恐ろしい会話なんだろうか。
でもあれは本心からの言葉であって後悔なんてしてないし今もその
気持ちは変わらない。

「カナちゃん!」

「ユウくん!」

ユウくんが来てくれるのはいつも夜遅く。

わたしの家は村から離れた山奥の小さな家なのにユウくんは毎日わたしに会いに来てくれる。

「ユウくんっ!おなかにたくさん血がついてるっ!だ、大丈夫!？」

「あつごめん!すっかり忘れてた!この血は僕のじゃないから心配しなくても大丈夫だよ」

よ、よかったぁ……。

いや、良くないことなんだろうけど、わたしにとっての一番はユウくんだけ。

こんなわたしは狂っているんだろうけど、そうとしか思えないんだから仕方がない。

そのユウくんが怪我をするなんてそんなの、そんなの……。

「ごめんね。早くカナちゃんに会いたくて着替えてくるのを忘れて来ちゃった。……僕が怖かったよね?」

「ううん。……わたしは、ユウくんが怪我した方がもっとも」と

怖い……。怪我、しないでね？」

「……。うん。僕は強いからなかなか怪我しないんだけど、カナちゃんも悲しむなら絶対に絶対に怪我しない」

「本当……。？」

「うん。ただカナちゃんもどんな軽いことでも怪我しないでね」

その言葉に私は不自然にならないように指を背中に隠した。

「うん。わたしはそんなことしたりしないよ！」

大丈夫。ばれてない。

「じゃあなんで今手を背中に隠したの？」

……。ばれてました。

ユウくんはなんでもおみとおしみたい。

「カナちゃんのこと知らないことなんて僕にはないよ！ほら、手をみせて！」

ううゝ……。出来れば見せたくなかったんだけどなあ。
そのほうが出来る女って感じがするし……。

「…なんで指先が怪我してるの？」

ユウくんの顔から表情が消えた。

ユウくん。わたしだってユウくんのこと知らないことはないよ？
だって今何を考えているかわかるんだもん。

「ち、違うよ？今日は村の人からやられたんじゃないよ！これは私
がドジしちゃったの！」

「……本当、に？嘘はついちゃダメだよ？」

「嘘なんかじゃないよ。今日は………これ作ってたの」

わたしはいつユウ君が来てもいいようにと懐に入れておいたものを
取り出す。

「これ、………手袋？」

「グローブでもいいよ。これを早く渡そうと焦っちゃって指にさし
ちゃったの……。ユウくん、人を殺すときに手に何もつけないで
しょ？それで捕まったら嫌だし……。それに、ユウくんの手はい

「つも冷たいから・・・心配になる」

わたしはユウくんの手を握りながら答えた。

ユウくんの手はいつさわっても冷たい。

ひんやりしてて触ってもらえるとすごく気持ちいいけど、やっぱり暖かくしてくれないとわたしが不安になっちゃうから。

「ユウくんがいつかいなくなっちゃうと思っちゃう。わたし、ユウくんがいなくちゃ、嫌だよ・・・」

ユウくんはわたしの全て。

もしユウくんに出会えなかったら今のわたしはいない。

・・・わたしの大切で、大好きな恋人。

わたしの前からいなくなったりしないです・・・！

「カナちゃんっ」

おもむろにユウくんがわたしに抱き着いてきた。

優しく暖かくて、わたしが苦しくない程度に強く抱くのでとても心地よい。

「カナちゃんは僕のお嫁さんになるんですよ。僕はそれは楽しみに待ってるんだからカナちゃんから離れるわけがないじゃないか！それどころか毎日一日中側にいたいくらいだよ！」

「ユウくん……」

「逆に僕は殺し屋だから……、カナちゃんが僕から離れるんじゃないか毎日不安だよ」

「あ、ありえないよっ！大好きなユウくんから離れたくない！」

ユウくんから離されないようにわたしもユウくんを抱きしめ返す。

「ユウくんが殺人しても変わらない！だってこんなにもユウくんがすごく好きなんだもんっ！」

「カナちゃんっ……！」

そのままわたし達は何度も唇を重ね合わせた。

ユウくんが好きすぎてどうにかなくなってしまっただった。

いや、狂っちゃってるんだけどね。

たぶんユウくんもそうだったのかな？

「ユ、く……んっ………だ………すきい………」

「僕も、だよ……カナちゃん……！」

結局その日のうちにユウくんにごろーブを着けてもらうことはでき

なくなっちゃった。
まあ、いつか。

次の日の朝方。

ユウくんがまた仕事に行ってしまう。

わたしは早起きしてユウくんのために朝ごはんを作ってあげた。

「早くお嫁さんに来てよ……。そしたら一日中ずっと一緒にいられるのに……。」

ユウくんがわたしの隣にぴったりくっついてくるので、……ちよっぴり恥ずかしいけど、あ〜んして食べさせてあげてる。

ユウくんも嬉しそうに食べてくれてわたしもすごく幸せ！

「だってユウくんは生まれたときから本部で暮らしてるからいいけ

ど、わたしが本部で暮らすには18歳にならないといけないんですよ？あと半年の辛抱だよ」

「近いからこそ待てないよお……。もう十三年も待ってるのに……」

「それだったら私だって十三年だよ？」

わたしだつてずっと待ってるんだから！

「ねえユウくん……。今夜は、これる？」

「……難しいかもしれないけど、絶対に会いに行く！明日は一日中休みだから、カナちゃんに会って元気をもらうんだ！……待っててくれる？」

「うん！待ってる！わたしもユウくんのパワーをもらうだけで元気になれるもん！」

今夜も待ち遠しいなあ……。！

< 恋人同士のお話し > ある日の夜のこと (後書き)

9 / 15、間違いを修正しました。

< 恋人同士のお話し > パートナー（前書き）

視点がユウくん カナちゃん ユウくんになります。

< 恋人同士のお話し > パートナー

・・・つたく、手間取らせてくれる。

今夜殺したターゲットは、ものすごく面倒なやつだった。
何せ二日もかかったんだ。

とても運がよく、人望にあふれるやくざの頭領。

まあ人望よくても悪いことしてたのには変わりはないんだけどな。
あんなどうでもいいやつ相手なんかよりも、僕は一分一秒でも早く終わらせてカナちゃんの僕だけに見せる宇宙一可愛いらしい笑顔をずつつつと見つめ続けていたいというのに！！！！

まあこの道を選んだのは僕自身なんだからしかたないか。

さらさら興味ないターゲットの顔を脳内から完璧に消し、今夜から明日の朝までカナちゃんを過ごす甘く幸せな時間を脳内でコミュニケーションしながら本部に着くと、まっすぐに受付へ向かった。

「完了。報告書。じゃっ」

「待てコラ」

・・・僕が急いでんのがわかんないのか？この馬鹿は。

「・・・なんでお前がこんなとこにいるんだよ？」

「いやー、一生懸命頑張ってるお前を社長直々に迎えてやるつとわ
ざわぞ」

「・・・・・・・・」

「そんな露骨に嫌な顔すんなよ。それに報告が簡潔すぎだ。俺様、
社長なのに何でそんな失礼な態度取られなきゃならないのよ」

「任務は完了した。報告書も提出したからそれ見てろ。じゃあな」

「いやだから待ってっ。お前に渡さなきゃなんないもんがあんだよ」

無視したいのはやまやまだが、その場合後々めんどくさいことにな
りそうだ。

「だったら早く渡せよ」

こんなむさいおっさんより、カナちゃんを視界に入れたい。

「そんな急かすな急かすな。・・・急いでるにしても、もっと俺様
に愛想よくしろよな。そして優しさも」

「カナちゃんでもないのに何で優しくする必要がある？」

「・・・本当にお前の頭ん中は『愛しのカナちゃん』で埋め尽くされてんだな」

愚問だな。

「ほれ。お前に渡したいのはこれだけだ」

「これは・・・」

「まあ決めるのは自由だ。捨てるも使うもな」

「ユウくん、そろそろ来てくれるかな？」

ユウくんに会うのは五日ぶり。すっごくすっごく楽しみ！

明日の昼までお仕事ないらしいから、今夜はたっぷりユウくんにご甘

えちやおう！

えへへえ〜……………早く会いたいなあ〜……………ユウくん……………

「カナちゃんっ！！」

「！ユウくんっ！？」

窓を見るとわたしが会いたくて会いたくて仕方がなかった人。ユウくんはたいてい窓から来てくれるの。わたしに会うのに玄関からくる時間がおしいんだって！

「会いたかったよ！カナちゃんカナちゃんカナちゃんっ！」

痛いくらいに力いっぱいわたしを抱きしめて、それでいて苦しくないほどに優しい抱擁。

「私も！五日ユウくんに会えないだけですっごく寂しかった！」

「僕もだよっ！ああ、カナちゃんの匂いだあ……………！」

「ユウくん……………！」

負けじとわたしもユウくんの大好きなニオイを嗅いだ。

わたしの愛しい人。

たったの五日。なのにどんなにこの日を待ち望んだことか。
ユウくんに会えないそれはとても長く感じてしまった。
今、ユウくんはわたしを求めてくれてる。
久しぶりの彼はいつも以上に輝いて見えた。

「ユウくんは来れる日は毎夜来てくれるけど、来てくれない夜はいつも怖い・・・。一人ぼっちで、寒くて、寂しくて、夜がすごく長く感じて眠れないの・・・。」

「カナちゃん・・・。」

「で、でも、今夜は一緒にいてくれるんだよね？だったら寂しくない。ユウくんが一緒にいてくれるだけで、辛いことなんて忘れさせてくれるから・・・！」

「一晩中いてあげる！僕以外何も考えられないくらいに・・・！」

「ユウくん・・・！」

顔をあわせれば、フワッと、触れるだけの優しいキス。

それはすぐに離れてしまったけれど、でもたったそれだけのことでわたしの胸はいっぱいになる。

それはユウくんにとっても同じこと。

二人の目に映るのはお互いの姿だけ。

考えることもお互いのことだけ。
その二人が思うことは同じこと。
そしてそのキスが引き金になる……はずだった。いつもの
ら。

「……にゃあ」

この第三者がいなければ。

「……ネコ、ちゃん？」

なんでわたしの家でネコの声をするの？しかもすごく近くで。
ユウくんへと顔を近づけていたわたしは不思議な鳴き声によってそ
の動きは止まる。

動物には嫌われやすいから飼ってないし、山奥のこんな家に野性の
ネコが気ままに近づいて来たとも思えない。
せっかくの甘いムードだったけど、わたしの意識はその声のほうに
向かってしまった。
だってどうしても気になっちゃうんだもん。
ごめんねっ、ユウくん！

思わずユウくんから離れて声の元を目でたどると、それはユウくんのすぐ後ろにある籠の中から顔をだしていた。

「ネコちゃん・・・」

わたしが話しかけるともうひと鳴き。

ユウくんが心の中でひどく舌打ちしたことを私は知らない。

「仕事の、サポート？」

「うん。ここに来る前に社長のやつに無理矢理押し付けられた」

使えない馬鹿ネコのせいでカナちゃんとの甘い雰囲気はなくなったから、僕達は机に向かい合ってお喋りしてる。
本来ならカナちゃんは僕の膝の上に座るのが普段の僕たちの定位置だったし、カナちゃんもいつもどおりそうしようとしてた。

でもまたしても馬鹿ネコが邪魔をする。

ネコ野郎は僕が気に入ったのか座ろうとするカナちゃんに牙をむく。あまりにもしつこいためカナちゃんは諦めようとしたけど、僕はネコをあしらってカナちゃんを上座らせようとした。

そしたらコイツはあるうことかカナちゃんの服を引つ掻きやがった。服だからよかったけど、カナちゃんのすべすべした柔らかい肌に傷でもつけたら本気で殺ってやるっ……！
いつそのこと今すぐに殺してやるうかと思っただけど、でもカナちゃんが止めたから実行には移していない。

……カナちゃんのいないひざ上が、すごく寒い。

「カナちゃん、チューしたい……」

「私も……！でも、ネコちゃんを追い出すのは可哀相だし……。ごめんね、わがまま言って……」

「優しいカナちゃんすごく好きいつ」

……せつかく、せつかくカナちゃんと幸せな甘い甘いひと時を過ごそうとしてたのに。

明日の昼からは、またしばらくここに来ることは出来なくなる。

僕らみたいなのは昼はあまり公に歩いてはいけない。出てもいいけど、それは月に一度程度だ。夜までの間は本部内で訓練したり依頼を受けたり情報を探ったり暇を潰したりする。

だからカナちゃんに会いに行けるのは仕事終わりの夜。もちろん結婚すれば仕事のない日は二十四時間四六時中毎日でも一緒なんだけどね！

けど、……明日からはちょっと時間がかかる。

なんでも次の敵は旅客機に乗るらしいから僕も乗らなきゃならないらしく、さらにその先の目的地では運びの依頼がある。

つまり一週間前後は会えなくなるから今夜はカナちゃんに会えない分をたっぷり補給しようと思ったのに、……この泥棒ネコは……っ！

いっそのこと、コイツは後でこっそり殺す……？

「でも何でネコなの？」

「一番一般的な動物だしね。うちは人員は少ないけど動物なら調教すればすぐに使える。もし周囲にばれても不審がられないし。で、アイツは試しに僕にも使わせてみようと考えてこのネコを渡したんだと思う」

僕は動物とかのサポート役を持ったことがないけど、こういう小動物は仕事中に人の注意を誘えるし本部への報告役にも使えるから何かと便利らしい。

「しかも自分で勝手に本部へ帰れるほどの智能持ちだし。もうネコというより人間に近いかもね」

「……ユウくんは、その子をどうするの？」

「……実は悩んでいるんだ。

「一度でも使えたら毎回使おうと思うんだけど……」

そしたら報告も完了後の後始末も何もかもをこいつに擦り付けられるし、僕は今まで以上に早くカナちゃんのもとへ会いに行けるしね。でも今回みたいに僕たちの愛の妨げになるなら、いらないや。

僕はカナちゃんといられるなら何でも捨ててやる。

「・・・やだっ」

「カナちゃん？」

「ユウくんのパートナーになるのは私だもん！今もこの先もずっと、大人になってもっ、死んでもっ、ユウくんの隣は私だけだもんっ！・・・なのに、なんで、なん、で・・・っ・・・っ！！！」

・・・僕はこんなカナちゃんを見るのは初めてだった。

カナちゃんが、嫉妬している！

僕の大好きなカナちゃんが、大好きな僕の隣を取られて、嫉妬してる！！

僕はカナちゃんが想ってくれるなら僕は何もいらぬのに。別にこのネコをすぐに排除しても僕は構わないのに。

「ふっ・・・ぐ、えうっ・・・す、うん・・・っ・・・！！」

ああ・・・カナちゃんが本格的に泣き出した。

愛しの彼女を慰めるのは僕の役目だ。

それにしても笑っても泣いても怒ってもカナちゃんは可愛いなあ。。。

「・・・カナチ」

「ニヤァ・・・」

「・・・ネコ、ちゃん・・・？・・・っ・・・わたしのこと、嫌いなんじゃ・・・？」

カナちゃんの膝にてしてしとネコパンチをしていた黒ネコは、その言葉の返事としてカナちゃんに擦りよると膝の上で丸くなり始めた。

「・・・ありがとうね、ネコちゃんっ・・・！」

コオ・イイ・ツウ・ハァーっ！！！！

どこまで僕の邪魔をすれば気が済むんだこのクソネコがあっ！！！！

カナちゃんに言われたかった言葉も笑顔も全て掻っ攫った宿敵。
今すぐその真つ黒な皮を剥がして残りを跡形もなく切り刻んでしま
いたい。

・・・だが、ここで不用意に嫉妬してはダメだ。

雰囲気ぶち壊しだしカナちゃんに心が狭いと思われるかもしれない。
いや、自分がカナちゃん以外に狭いのは自覚ありまくりだけどない？
だけどそれはつまりカナちゃんにだけは広くなれるのだから、狭い
僕の姿なんて見せられっこないっ！

「・・・ごめんね、さっきは」

「・・・」

たったそれだけでさっきまでの全部をいとも簡単に水に流し、すつ
かりネコに心が開いたカナちゃん。その優しい手で撫でられたネコ
はとても気持ち良さそうだった。

正直に言おう。かなり妬ましいっ！！

もともとカナちゃんは人見知りで人が苦手。麓ふもとの村のやつらがくだらないことで何かとカナちゃんにやつかんでくるからだ。子供は親のいうことを信じやすい。そして同じことをいう大人が多ければ多いほど、それが正しいのだと認識してしまう。

つまり村の子供から老人までの老若男女は、皆彼女を疎む。

まあ本当に極少数の男は違ったみたいだけど、……僕がそれをただで見過ごすとも思う？

だから友達とかはいないけど、でも向こうから仲良くしてきてくれる人や動物にカナちゃんはとても友好的。

寂しいのはわかる。だから懐くものには優しいのもわかってる。

でも、おもしろくない。

かなりおもしろくない。

ひっっじょ〜〜〜っにおもしろくない!!

「……だめっ」

「ユウくん？」

今、僕のネコに対する勘忍袋の緒が——一気にぶちギレた。

「カナちゃんに触るのは僕だけっ！動物だろうとそうだっ！僕だっ
てまだカナちゃんにひざ枕してもらったことないのに、お前なんか
が先にそこにいるんじゃないっ!!」

「にゃーッー!」

怒りの形相でネコの首ねっこを掴むと窓から勢いよく放り投げ、代わりに自分が彼女のひざを独占する。

カナちゃんのひざは温かくて柔らかくていい香りがした。

普通この時、よほど悪い彼女ではない限りは彼氏の行動に怒ったり泣いたり幻滅したりなどの何らかのショックを受けるはずである。

だがそれは「普通」の場合。

カナちゃんはいたって「普通」ではなかった。

だってカナちゃんの一番はいつもユウくんオンリーだから。心は毎日ユウくんですめている。ユウくん以外は、いない。

さっきまでは「ネコちゃんを追い出すのは可哀相」と思っていたカナちゃん。でも今はユウくんにひざ枕をすることが出来てるんだから、もうネコなんてもうどうでもいい。

「ユウくん、嫌じゃない？嬉しい？」

「嬉しいどころじゃない。天国。もうずっとここにいたい」

愛しのカナちゃんによるひざ枕により、彼の今までの怒りや嫉妬は
すぶさま吹っ飛んでいった。

「ふふっ、これが天国だったらユウくんは死んじゃってるね」

「カナちゃんが一緒なら別にそれでもいい!」

「わたしも死ぬときはユウくんと一緒がいい!でもひざ枕で死んじ
やうんなら、抱きついたりとかチューとか、それ以外はできないこ
とになっちゃうよ?」

「ぐうっ……。カナちゃんが、意地悪になった……」

「これもユウくんのおかげだね!」

「……そんなこと言つのはこの口?」

「んっ……。ユウ、くん……!」

だって本部に逃げ帰ったネコ存在など、二人はすでに忘れている。

それが彼らにとって『普通』の日常

< 恋人同士のお話し > パートナー（後書き）

次の日、社長の口から二人（？）のチームは即解散となった。
というかネコからしたらすごい迷惑（笑）

「死ぬときは一緒」という言葉はシリアスな言葉なのに、この二人
が言うとなぜかあっさり感がありますね。

二人の中では「一緒に死ぬのは当然のこと」、「常識の範疇」なん
だと認識しているのかも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9751v/>

愛闇

2011年11月8日15時20分発行